

優秀賞

最後の「ありがとう」

東京都
港区立青山小学校 四年

竹俣 紅

私のおじいちゃんは、私が小さい頃から色々なことを教えてくれました。

一番の思い出は、釣りが好きだったおじいちゃんと釣りざおを使つて釣りごっこをしながら、たくさんの魚の名前を言い合ひっこしたことです。おかげで私は、たくさんの魚のことを知ることができました。

一緒に住んでいるのに、おじいちゃんとお手紙交換をしていたおかげで、手紙の書き方も自然に覚えることができました。小さい時にかいた、とても絵には見えない絵やミミズのような字で書いたお手紙をおじいちゃんは誉めてくれて、自分のお部屋のかべに貼ってくれて、まるで展覧会のようにしてくれました。

でも、私はそれが嬉しくて、絵を描くことが大好きになりましたし、手紙を書くことが習慣になりました。

私が将棋大会で入賞してもしなくても、いつも「頑張りましたね。すごいですよ。」と言ってくれました。

東京の代表になれた時も、「素晴らしい。いつもの勉強の成果ですね。」と誉めてくれました。

今、考えるとおじいちゃんつて、よく私を見ていて、私のやる気をいつも引っぱり出してくれていたんだと思います。

でも、おじいちゃんは、もう家にいなくなつてしまいました。

おじいちゃんが亡くなった時、私もそばにいました。眠つているだけのようでした。

おそう式の時、焼かれてしまうおじいちゃんに最後の別れをしなくちゃならなくなりました。

今までのおじいちゃんとの思い出がぐるぐるまわつて、絶対にさよならをしたくなくて涙が止まらなくなりました。

私は、あまり声を出せなくなつてしまつたけど、「また会おうね。ありがとう。」

と自分の心を「生懸命、声にしました。

しばらくして、骨になったおじいちゃんに会いました。それは、少しピンク色がかつた白いサンゴのように見えました。私は、人の骨だつたけど、全然怖くありませんでした。だつて、おじいちゃんだから。

海釣りが好きだったおじいちゃんだから、サンゴになつて良かったと安心しました。

そういえば、俳句の作り方を教えてくれたのもおじいちゃんでした。

「また会おう
サンゴになつた
おじいちゃん」